

太田川放水路のあゆみ

～水と緑の平和都市・広島の礎～



平成30年2月
国土交通省中国地方整備局
太田川河川事務所

太田川放水路完成50周年に寄せて

太田川のデルタ（三角州）地帯の上に発展した広島市街地は、過去に幾度となく洪水被害に見舞われ、人々の生活が脅かされてきました。国は、太田川の洪水被害を軽減するため、昭和7年に太田川放水路事業に着手しましたが、戦局の悪化により事業の一時中断を余儀なくされ、また、人類史上初めての原子爆弾の投下により、広島市街地は壊滅的な打撃を受けました。

終戦を迎え、再開された太田川放水路事業は、広島市の都市基盤の骨格を形成する事業として、区画整理などの戦災復興事業と連携して進められ、昭和43年3月に完成しました。太田川放水路の完成によって、広島市街地全体の洪水に対する安全度が飛躍的に向上するとともに、洪水を放水路へ分流することを踏まえ、市内派川において河岸緑地の整備が進められるなど、太田川放水路は水と緑あふれる「水の都ひろしま」の礎となっています。

この度、太田川放水路完成50周年の節目を迎えるに当たり、太田川放水路の役割を再認識しつつ、事業にご協力頂きました地域の皆様と、幾多の困難を克服し事業を完成させた先人の方々に深い感謝と敬意を表します。

結びに、これからの50年に向けて、地域社会の安全・安心の確保はもとより、世界に誇る国際的な水と緑の平和都市・広島にふさわしい水辺空間の創出に取り組んでまいりますので、今後とも皆様のご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

国土交通省 中国地方整備局長 川崎 茂信





◎もくじ

太田川の概要	2
放水路建設前史	3
太田川放水路の建設	6
太田川放水路完成後（その1）	8
太田川放水路完成後（その2）	10
太田川放水路関連年表	12

太田川の概要

太田川は、西中国山地の冠山（標高1,339m）にその源を発し、幾つもの溪流を合わせながら東へ流れ、主要な支川である根谷川・三篠川と合流します。その後、流れを南向きに変え広島デルタの北端で太田川放水路と旧太田川に分派し、さらに天満川、元安川等に分れ広島湾に注ぐ流域面積1,710km²、幹川流路延長約103kmの一級河川です。流域は、広島市、廿日市市、安芸太田町、北広島町など4市3町にまたがっています。

太田川の上流部は、中国地方でも雨の多い地域で、国の特別名勝「三段峡」に代表されるように変化に富んだ景勝地が多く見られます。中流～下流部は「全国

名水100選」に選ばれるなど豊かで良好な水質を保ち、広島市、呉市、瀬戸内海島しょ部等の水道・工業用水として利用されています。

下流デルタ域に広がる広島市は、中国地方の中心都市として人口及び高度な都市機能が集積するとともに、太田川デルタ域に占める水面の比率が約13%と全国屈指の高さであることから「水の都」とも呼ばれ、快適な都市の水辺空間の創出など魅力的な都市づくりが進められています。一方で、一度氾濫が生じた場合は甚大な被害が想定され、さらなる安全・安心の確保が求められています。

太田川流域図



太田川上流部（滝山川）の温井ダム



蛇行を繰り返して流れる中流部



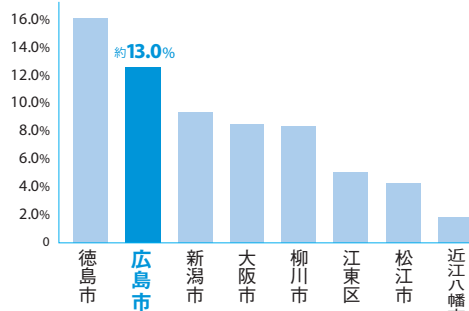
山地を抜け平野を流れる下流部

流域及び氾濫域の諸元

流域面積（集水面積）	1,710km ²
幹川流路延長	103km
流域内人口	約102万人
想定氾濫区域面積	約90km ²
想定氾濫区域内人口	約55万人

出典：第10回河川現況調査結果（H22）

「水の都」該当都市におけるDID区域内の水面密度



注1：DID内水面密度＝DID内水面面積／DID面積（市役所を中心とした半径5kmの範囲）

注2：対象8都市は「水の都ひろしま」構想の中で選定した「水の都」該当都市のうち、「清流や湧き水に恵まれた都市」を除いた都市

出典：国土交通省・広島県・広島市（平成15年）「水の都ひろしま」構想

放水路建設前史

太田川三角州と干拓によってつくられた町・広島

広島の発展の歴史は、天正17年（1589年）、毛利輝元が太田川の三角州（デルタ）に広島城の築城を開始したことに始まります。築城当時の海岸線は現在の平和大通り付近であり、以降、江戸、明治～昭和にかけて三角州の前面の干潟がつぎつぎと干拓・埋立され、現在の海岸線を形成しています。平時、穏やかに流れる川は、飲み水、農業用水、舟運など多くの恵みをもたらし、水辺は人々の憩いと賑わいの場所にもなっていました。なかでも舟運は、鉄道などの陸上輸送が盛んになる昭和初期まで続けられ、藩政時代には三篠川筋からは米などが、太田川上流域からは林産加工品（木炭・紙）や鉄などが下流に向けて運ばれました。また、猫屋橋（現在の本川橋）の雁木は荷物の積み卸しを行う舟で賑わい、現在でも舟を繋いでおく舟繋石や復元された常夜灯が残っています。



広島城築城前の太田川三角州（想像図）
（広島城蔵）



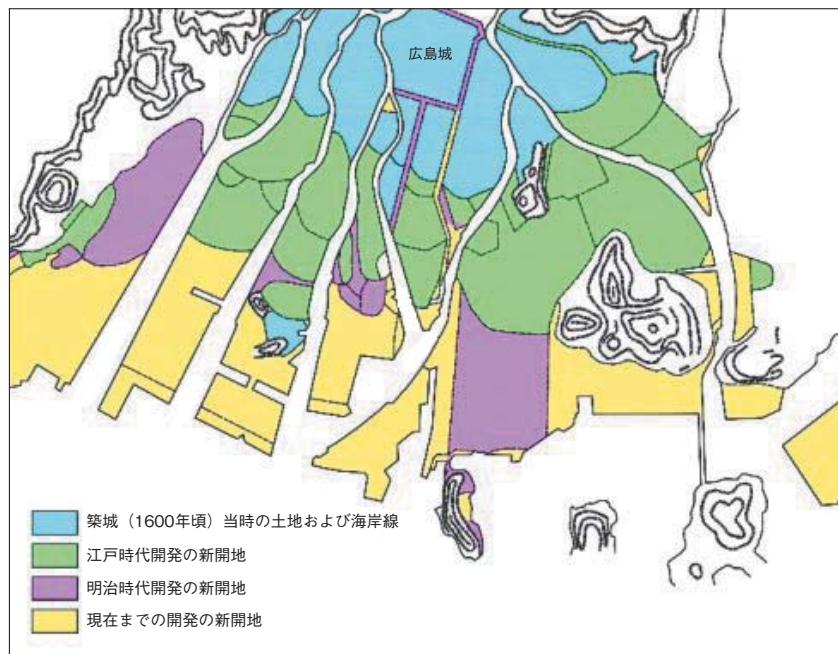
本川橋右岸下流の雁木と舟繋石
（広島城蔵）



猫屋橋（現本川橋）下手の雁木と停泊する船（「広島城下絵屏風」部分）
（広島城蔵）

太田川の舟運と雁木

太田川では、最盛期には安芸太田町戸河内まで船が通っていました。雁木は、三角州の潮の干満によって水位が変化しても、船への乗り降りや荷揚げに利用できるように川岸に設けられた階段です。空を飛ぶ雁の列のようにギザギザの形をしていることに由来します。



太田川三角州の干拓・埋立による開発進展状況

放水路建設前史

三角州の町は洪水の危険と隣り合わせ

広島市の町は太田川の恵みを受ける一方、三角州上に発展したため、常に洪水の脅威にさらされていました。江戸時代には、記録によると規模の大きな洪水は約30回を数えています。このため、毛利氏、福島氏、浅野氏と城主は替わっても治水対策は大きな課題であり、堤防や河道の整備、水制の設置、砂掘りなどの治水対策がとられてきました。また、水防の出動の目安となる量水標の設置や、堤防を守るためのお触れも出されています。



承応2年（1653年）御城下洪水以後所々堤高下出来絵図

承応2年（1653年）の大洪水後に堤防を修復した際、いわゆる「水越の策」を採り、城側の堤防を対岸のそれより9寸（0.27m）から8尺（2.4m）高くしたことを記録する絵図（広島市立中央図書館蔵）



基町環境護岸に復元された水制

太田川の水制

水制は堤防から川の中央に向かってのびた構造物で、洪水の速い流れが直接堤防にぶつからないようにして堤防を守る働きがあります。

このような水制を、広島藩は一本木の鼻（白島の北端）から三番櫓（相生橋付近）までの間の本川東岸に設けました。現在、空鞘橋と相生橋の間に2つの水制が再現されています。



浅野氏時代の治水概略図（1785年頃）

福島氏時代に続き城側の堤防を高くする水越の策や、水制の設置、量水標の設置、砂掘り、鉄穴流しの禁止などが行われた。

たび重なる洪水の被害

明治22年(1889年)4月、広島市は市制を施行し全国で最初の都市の一つとなりました。それ以降、広島が近代都市として発展していく中で、たび重なる洪水により多くの人命、財産が失われました。特に大正8年(1919年)、昭和3年(1928年)の洪水被害は大きく、これを受けて地域の人々は太田川の本格的な改修を国に強く求めました。



大正8年7月洪水 相生橋流失状況



大正12年6月洪水 白島町浸水状況



大正8年7月洪水 三篠町打越家屋被害状況



大正12年6月洪水 白島町浸水状況



大正14年9月洪水 広瀬町浸水状況



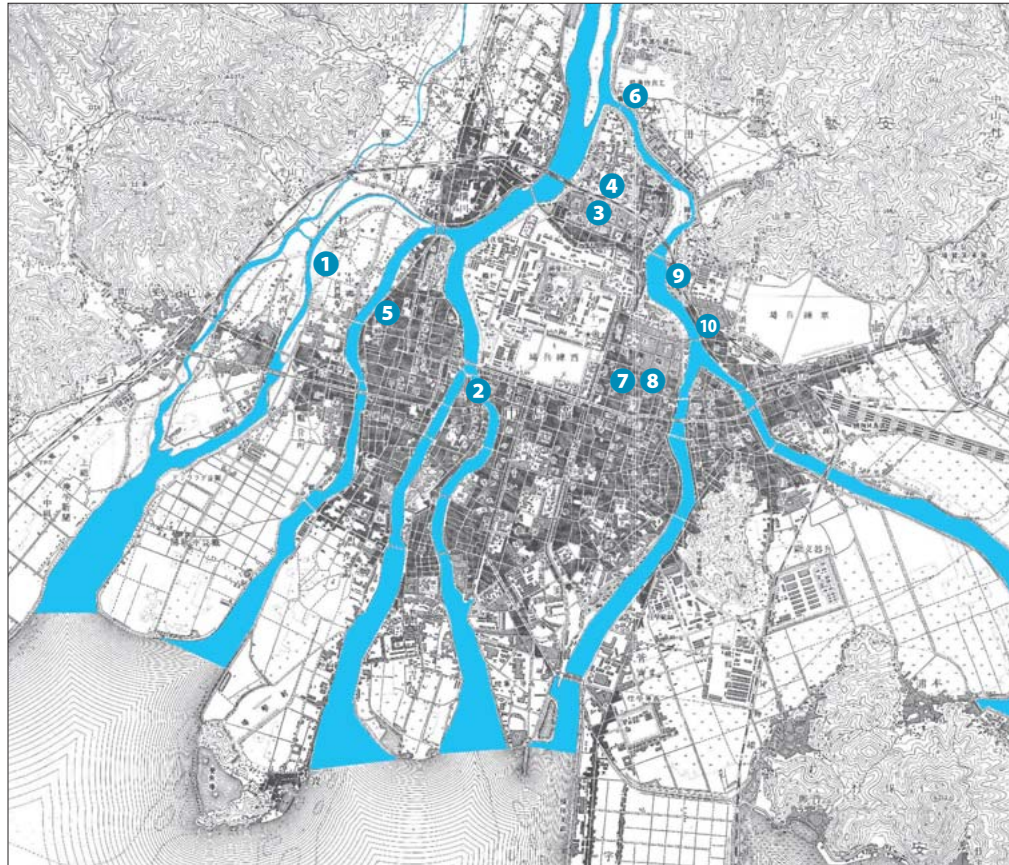
大正15年9月洪水 牛田町畑流失の状況



大正15年9月洪水 上流川町浸水状況



大正15年9月洪水 鞆町浸水状況



大正14年測図、昭和5年陸地測量部発行 二万五千分の一地形図「広島」



昭和3年6月洪水 常盤橋流失状況



昭和3年6月洪水 栄橋及び水道管流失状況

[写真提供：広島市公文書館]

太田川放水路の建設

原爆の惨禍を乗り越えて

地元の熱意が実って、昭和7年（1932年）から国による太田川改修事業が開始されることになりました。計画の基本は、デルタを流れる7本の川のうち、西側の2本（山手川、福島川）を利用して延長9kmの放水路を造ることでした。

工事は昭和9年（1934年）から下流より順次進められましたが、戦局の悪化により昭和19年（1944年）には一時中断し、そして広島は運命の昭和20年（1945年）8月6日を迎えます。

戦争や原爆投下による一時中断はあったものの、昭和26年（1951年）には本格的に工事を再開しました。

福島川の旧堤防

太田川放水路事業により埋め立てられた福島川の旧堤防は、現在でも福島町2丁目付近などに残っており、周辺より道路が高くなっているのがわかります。



福島町2丁目交差点（旧福島川旧堤防上）から南を望む



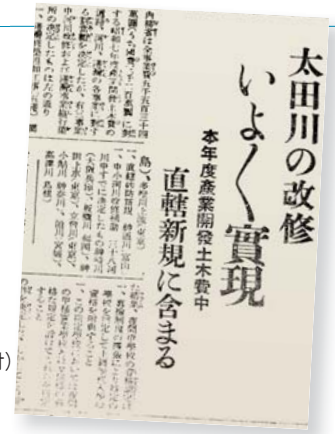
原爆投下翌日（昭和20年8月7日）の米軍撮影空中写真

焦土の中に建設途中の放水路が残された。北部には焼煙がたなびき、後に平和大通りとなる建物疎開跡の白い帯も見て取れる。（国土地理院HPより）



原爆ドームのたもとにある建設省（内務省）原爆殉職者慰霊碑

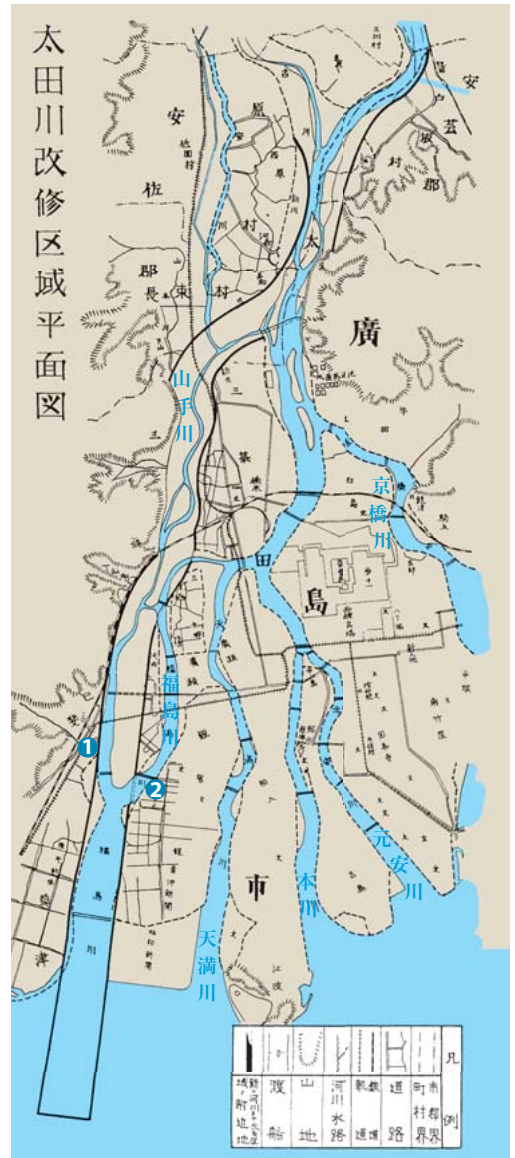
広島県産業奨励館（現原爆ドーム）には国土交通省中国地方整備局の前身である内務省中国四国土木出張所が入所しており、太田川改修事務所の職員も含め52名の方々が殉職された。



太田川改修着手を伝える新聞記事（中国新聞社提供、昭和7年4月21日付）



己斐護岸基礎工事（昭和10年）



太田川改修区域平面図

36年の歳月を要した日本でも有数の大規模工事

昭和30年代に入ると本格的な機械化施工の導入もあって、掘削、築堤、護岸などの工事が順調に進みました。事業の進展とともに、鉄道の付け替えや放水路に架かる新しい橋の工事も行われました。

昭和36年(1961年)には放水路工事の要となる大芝・祇園水門の工事も始まりました。両水門の完成を受けて、昭和40年(1965年)5月には待望の通水式を迎えました。

そして昭和43年(1968年)には、一部残っていた堤防工事やポンプ場も完成し、着手から36年の歳月を要して放水路は完成しました。以来、「太田川」の名称は放水路に移り、従来の太田川(本川)は旧太田川と呼ばれることになりました。



旭橋上流の掘削と福島川埋立状況(昭和35年)



横川駅付近の山陽本線高架化工事の状況(昭和38年)

横川駅の高架化

太田川放水路の建設によって、山陽本線及び可部線の嵩上げが必要となったため、横川駅構内も高架化されました。

また、用地買収の補償の一環としてガード下に商店街が造られました。



太田川放水路事業概要図



大芝・祇園水門着工当時(昭和37年)



通水後の放水路(昭和40年)



大芝水門の松杭基礎

松杭基礎

大芝水門、祇園水門の護岸や水叩き基礎部分には、支持力を確保するために数百本の松杭が施工されています。

放水路工事の事業量

工事延長	浚渫	掘削	築堤	護岸	橋梁	用地補償	家屋補償	概算事業費 (平成27年換算)
9.0km	139万㎡	390万㎡	169万㎡	26万㎡	11橋	159万㎡	1,800戸	9,600億円

マツダスタジアムと比較すると...

3.6倍

10.2倍

4.4倍

グラウンド面積の20.4倍

グラウンド面積の125倍

多彩な太田川放水路の橋

放水路事業に伴い架け替え、新設された橋は、道路橋9橋、鉄道橋2橋の11橋です。様々なタイプがあり、しかも当時の最新技術が採用されています。



ローゼアーチ型式の旭橋(昭和35年)

太田川放水路完成後（その1）

広島市の街地を守り、発展を支える太田川放水路

三角州の上に城下町が築かれて以来、絶えず洪水の脅威にさらされてきた広島市の街地は、放水路の完成によって太田川と共存できるまちづくりの基礎が整いました。原爆による廃墟から不死鳥のように立ち上がった広島の復興と今日の発展は、太田川放水路なくして語ることはできません。

太田川放水路は完成後50年を経て、今ではもともと自然に存在した河川のように地域に溶け込んでいます。



太田川放水路に守られて発展する広島市（平成29年）



年明けの年中行事、とんど



グラウンドゴルフ



ハセ釣り

古川締切と周辺の市街地化

古川は、その名の示すようにかつては太田川の本流でしたが、慶長12年（1607年）の洪水で本流が現在の流れに移ったため派川となりました。一方で、古川と本川に囲まれた地域では洪水により頻繁に浸水被害が発生していましたが、下流デルタ域の改修が未了であったため改修ができませんでした。

昭和43年（1968年）に太田川放水路が完成し下流デルタ域の治水安全度が向上したため、古川の分流地点が締め切られました。その結果、遊水地的な機能を有していた古川周辺は浸水被害も軽減し、山陽自動車道広島ICの立地や土地区画整理事業の進展によって市街地化が進みました。また、古川はせせらぎ公園として整備されています。



締切工事着手当時の古川分流点（昭和42年）

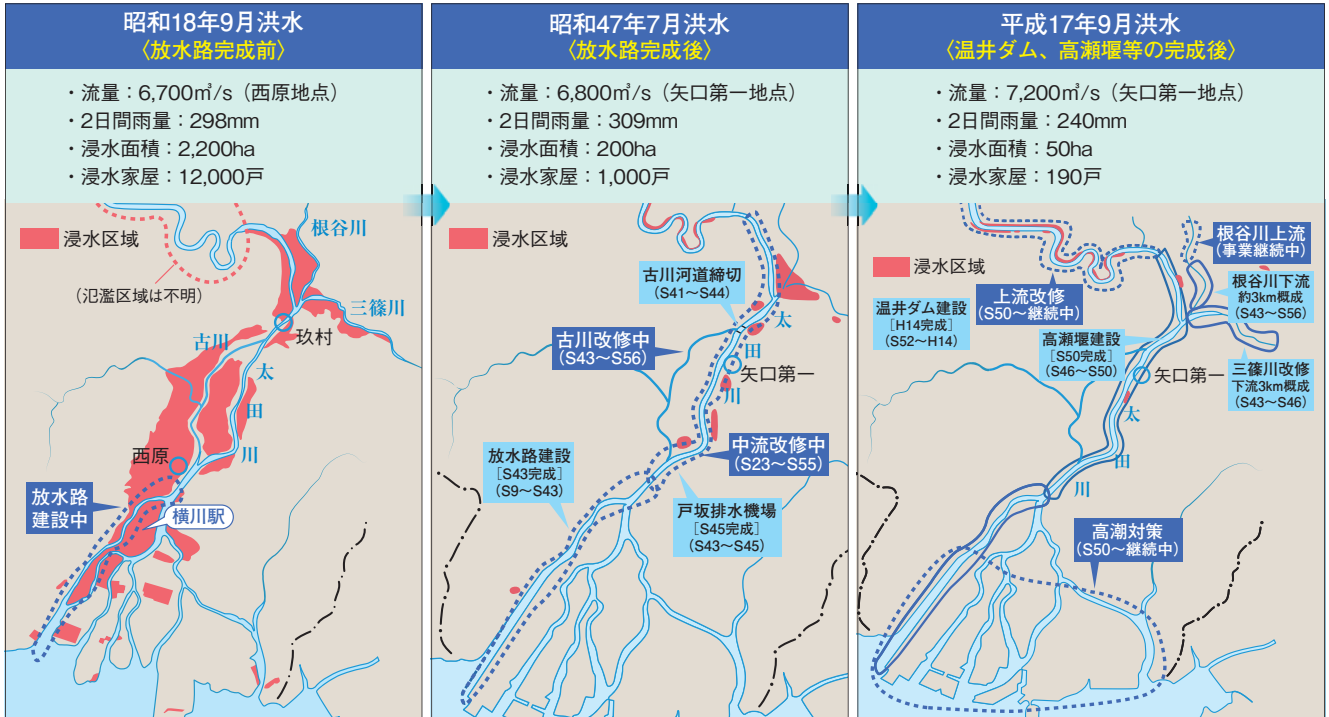


高瀬堰と古川周辺（平成29年）



太田川放水路の効果

太田川において戦後最大洪水となった平成17年(2005年)9月洪水と同規模の昭和18年(1943年)9月洪水、昭和47年(1972年)7月洪水時の浸水区域を比較すると、太田川放水路(昭和43年完成)、高瀬堰(昭和50年完成)、温井ダム(平成14年完成)などの治水事業の効果により、太田川下流部・下流デルタ域で大きく被害が軽減されています。



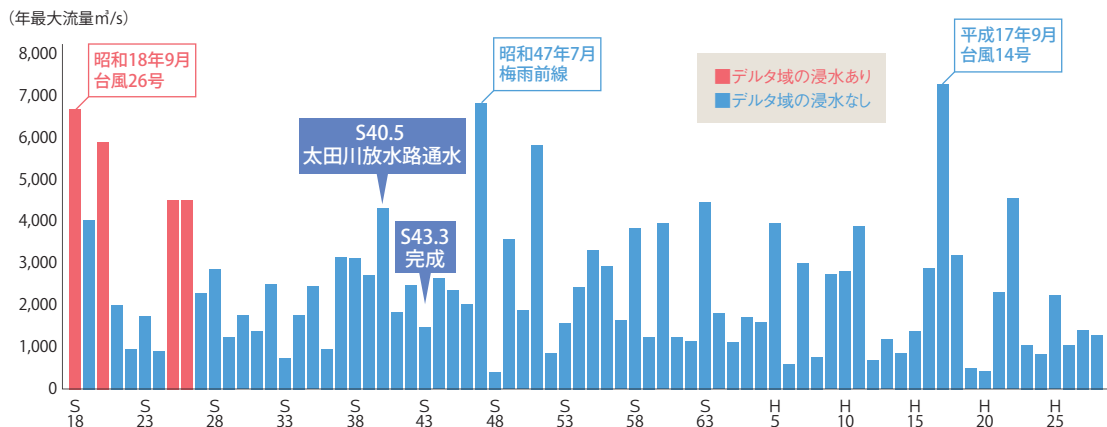
昭和18年9月洪水で横川駅は1.5mも浸水(イメージは現在の横川駅)



昭和47年7月洪水時の大芝水門と放水路の役割を伝える新聞記事(中国新聞社提供、昭和47年7月14日付)



平成17年9月洪水時の祇園水門 平常時は少ししか開いていない水門を全開にして放水路に多量の水を流し、市内派川の洪水氾濫を防いでいる。



- ・S18～S28は、西原地点における実績雨量及び洪水痕跡による推定値
- ・S29～S46は、玖村地点における実績流量
- ・S47以降は、矢口第一地点における実績流量

昭和18年以降の年最大流量 太田川放水路が建設される以前の市内デルタ域では、概ね4～5年毎に大洪水に見舞われ浸水被害が発生していましたが、太田川放水路完成後は洪水による浸水被害は発生していません。ただし、近年各地で発生している豪雨や気候変動を踏まえると更なる治水対策が求められています。

太田川放水路完成後（その2）

水と緑の平和都市・広島の礎となった太田川放水路

「太田川改修事業（太田川放水路事業）」と、「広島平和記念都市建設法（昭和24年）」に基づき昭和27年（1952年）に策定された「広島平和記念都市建設計画」の両者が相まって、今日の水と緑があふれる「水の都ひろしま」が形成されました。

具体的には太田川放水路事業の完成により治水安全度が飛躍的に向上したため、市内派川の大規模な改修が不要となりました。その結果、同時期に実施された戦災復興事業により市内派川沿いに遊歩道や公園、緑地帯を整備することが可能となり、緑豊かな水

辺空間が創出されました。

こうした整備により、憩いと交流の場として市民、観光客などによるイベント、散策、ジョギングや舟運など水辺の利用も進んでおり、先人達の努力による豊かな「水と緑」の空間は、広島の高貴な財産となっています。

その魅力をより一層引きだしていくために、平成15年（2003年）1月に国・県・市の3者が「水の都ひろしま」の実現に向けて取り組むためのよりどころとして、「水の都ひろしま」構想を策定し、魅力的な「水の都」づくりへの取組は続けられています。

「水の都ひろしま」構想

基本理念

- ① 水辺などにおける都市の楽しみ方の創出
- ② 都市観光の主要な舞台づくり
- ③ 「水の都ひろしま」にふさわしい個性と魅力ある風景づくり

基本方針

- つかう（市民による水辺の活用）
- つくる（水辺空間整備とまちづくりの一体化）
- つなぐ（水辺のネットワークと水の都の仕組みづくり）



つかう（市民による水辺の活用）



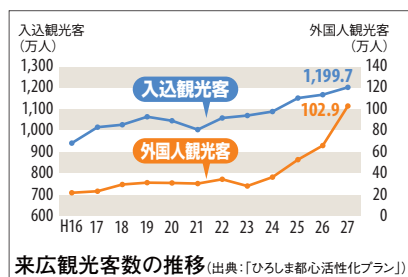
平成17年10月開業のオープンカフェ（京橋川右岸）により、賑わいのある水辺を創出



水辺のオープンカフェ（元安川左岸）



koikoiふれあい水辺フェスタ（太田川放水路）



来広観光客数の推移（出典：「ひろしま都心活性化プラン」）



水辺のコンサート（元安川親水テラス）

つくる（水辺空間整備とまちづくりの一体化）

■基町環境護岸の整備（昭和54～58年）

治水と親水性を考慮した護岸整備



昭和50年頃



整備後

■元安川親水テラス（平成8年）

世界遺産「原爆ドーム」等の周辺景観に配慮した整備



整備前



親水テラスを利用した灯ろう流し

つなぐ（水辺のネットワークと水の都の仕組みづくり）

■水辺の散策路のネットワークづくり

幹線道路との交差点部にアンダーパスを整備し、水辺の快適な歩行空間を確保



北大橋アンダーパス

■水上交通のネットワークづくり

雁木を利用した水上タクシーの運行等、水上からの市内観光を快適に行える空間を創出



水上バスの運行



水上タクシー（雁木タクシー）

◎太田川放水路関連年表

西暦	和暦	月	事項	
1889	明治22	4	広島市制を施行、「広島市」誕生	放水路建設前史
1897	明治30	9	山陽鉄道、徳山まで開通、己斐、横川駅開業	
1903	明治36	2	三篠村～可部町間に全国初の乗合自動車開通	
1909	明治42	12	三篠～祇園間の軌道開通	
1919	大正 8	4	太田川ほか25カ川が河川法準用河川に指定	
		7	太田川洪水：横川橋、三篠橋、相生橋等落橋	
1923	大正12	6	太田川洪水：十日市町、広瀬町等浸水	
1924	大正13	10	太田川改修計画のための内務省現地調査実施	
1925	大正14	9	太田川洪水：広瀬町、上流川町等浸水	
1926	大正15	9	太田川洪水：牛田町田畑流失、上流川町浸水等 福島川に西大橋架設	
1927	昭和 2	12	太田川改修計画の骨子決定（放水路案）	
1928	昭和 3	6	太田川洪水：栄橋、常盤橋等流失	
		6	太田川改修、広島港修築期成同盟会結成	
		11	可部軌道、可部～長束経路変更、電化	
1929	昭和 4	4	安佐郡三篠町、佐伯郡己斐町など隣接7町村、広島市と合併	
1932	昭和 7	4	内務省直轄太田川改修事業着手	放水路建設期
		7	太田川測量員詰所設置 山手川に（旧）旭橋架設	
1933	昭和 8	4	太田川測量員詰所を太田川改修事務所に改称 太田川改修計画、放水路に3,500m ³ /s、市内派川に1,000m ³ /s	
1934	昭和 9	4	太田川改修工事起工式	
1943	昭和18	7	太田川洪水	
		9	太田川洪水（台風26号）	
1944	昭和19	6	太田川改修工事中断 庚午橋（木桁）架設	
1945	昭和20	8	広島に原子爆弾投下	
		9	枕崎台風による洪水	
1948	昭和23	8	県知事、太田川放水路工事再開を発表 太田川改修計画流量改訂、放水路に4,000m ³ /s、市内派川に2,000m ³ /s	
1951	昭和26		太田川放水路工事、戦後初めて本格的工事に着手	
1953	昭和28	12	太田川改修補償問題、覚書締結	
1954	昭和29	1	旭橋、国道2号の橋として着工	
		3	福島川埋立開始	
		5	草津漁業補償、協定書締結	
		12	庚午橋、鋼トラス橋に架け替え完成	
1957	昭和32	9	新己斐橋着工	
		12	放水路工事に伴う国鉄可部線、山陽本線付け替え工事着手	
1960	昭和35	3	旭橋竣工式	
1961	昭和36	9	（旧）広島空港供用開始	
		11	祇園水門工事、新庄橋建設工事起工式	
1962	昭和37	2	大芝水門工事起工式	
		10	放水路工事に伴う可部線、新線に移設開通	
		10	三滝橋竣工（11月渡り初め式）	
1963	昭和38	3	祇園大橋完成	
		6	横川駅高架完成	
		12	新庄橋、山手橋渡り初め式	
		12	山陽本線、移設完了	
1964	昭和39	8	新己斐橋完成	

西暦	和暦	月	事項	
1965	昭和40	9	新己斐橋に電車軌道移設	放水路建設期
		12	大芝水門完成	
		3	祇園水門完成	
		4	太田川、一級河川に指定	
		5	太田川放水路通水式、己斐橋、大芝橋、新己斐橋渡り初め式	
		5	平和大通全線開通	
		7	太田川放水路河川敷で初の花火大会	
1966	昭和41	3	竜王橋開通	
1968	昭和43	3	太田川放水路完成	
1969	昭和44	3	古川締切工事完成	放水路完成後
		6	広島湾高潮対策事業全体計画策定	
1972	昭和47	7	昭和47年7月豪雨、太田川洪水	
1973	昭和48	12	新旭橋完成	
1975	昭和50	3	山陽新幹線、岡山博多間開業	
		10	高瀬堰竣工式 太田川水系工事実施基本計画改定、放水路に4,000m ³ /s、市内派川に3,500m ³ /s	
1977	昭和52		庚午橋上り線完成	
1979	昭和54	4	旧太田川基町環境護岸整備着手	
1980	昭和55	3	旧太田川における高潮対策工事着手	
1982	昭和57	3	西部開発事業竣工式	
		9	庚午橋下り線開通式	
1983	昭和58	10	基町環境護岸整備完了	
1989	平成元	7	庚午立体橋開通	
		7	海と島の博覧会開幕（～10/29）	
		7	太田川リバークルーズ運航開始	
1990	平成2	3	「水の都整備構想」策定（国・県・市）	
		4	広島城堀川浄化事業着手	
1991	平成3	4	新竜王橋開通	
1993	平成5	10	堀川浄化事業完成式	
		10	広島空港、新広島空港開港に伴い広島西飛行場となる	
1996	平成8	6	元安川親水護岸、テラス完成	
		12	原爆ドーム、世界遺産登録	
2001	平成13	10	広島高速4号線（西風新都線）開通	
		10	温井ダム竣工式	
2002	平成14	8	最後の太田川花火大会	
2003	平成15	1	「水の都ひろしま」構想策定	
		9	原爆ドーム～宮島の世界遺産航路運航開始	
2004	平成16	3	旧太田川、元安川、京橋川右岸地区が民間事業者等による営業活動が可能な「河川利用の特例措置を適用する区域」に指定	
		10	雁木タクシー運航開始	
2005	平成17	5	元安川親水テラスで初の「水辺のコンサート」（吹奏楽フェスティバル）開催	
		8	こいっ子ふれあいの水辺完成	
		9	台風14号による洪水、戦後最大流量を記録	
		10	京橋川水辺のオープンカフェ営業開始	
2007	平成19	3	太田川水系河川整備基本方針策定、放水路に最大4,500m ³ /s、市内派川に3,500m ³ /sの計画	
		11	「京橋川の雁木群」が土木学会選奨土木遺産に認定	
2011	平成23	5	太田川水系河川整備計画策定	
2012	平成24	11	広島西飛行場の供用廃止、広島ヘリポートとして供用開始	
2014	平成26	3	広島南道路、太田川大橋開通	

※青字は放水路完成後の市内派川環境整備、利活用等関連事項



太田川キャラクター「ゴギ」



太田川シンボルマーク

国土交通省中国地方整備局
太田川河川事務所

〒730-0013 広島市中区八丁堀3-20
TEL 082-221-2436 FAX 082-221-3245
<http://www.cgr.mlit.go.jp/oitagawa/>

